

新潟県立がんセンター新潟病院 地域連携だより

やすらぎリンク

-Yasuragi Link-

2026年
夏号

県民をはじめとする全ての患者さんに、
最善のがん医療を提供します。



- Contents

1. がんプロフェッショナル紹介 皮膚科
2. 二次検診のお知らせ
3. 「忘れられない看護エピソード」受賞者の紹介
4. ベッドコントロールセンターの紹介
5. 病院を支える職員の活力のみなもとは？

地域連携だよりが新しくなりました！

これまでの地域連携だよりの想いを受け継ぎながら、より見やすく、親しみやすい紙面にリニューアルしました。

地域とともに歩む病院として、さまざまな情報を発信してまいります。

「やすらぎリンク」の由来：

患者サポートセンターは「人と人」「心と心」また「地域と病院」をつなぐ（Link）役割があります。

病気に対する不安や悩みを抱える患者さん・ご家族と温かいサポート（医療・ケア・相談窓口）を確かに繋ぐ（Link）架け橋でありたいという願いを込めております。

また、当院そばの「やすらぎ堤」にちなみ、地域連携だよりを「やすらぎリンク」と名付けました。



新潟県立がんセンター新潟病院



皮膚科

竹之内辰也



患者さん一人ひとりに寄り添いながら、専門性を活かしてがん医療を支えるスタッフや診療科をご紹介します。今回は皮膚科の紹介です。

皮膚がんの早期診断から手術、進行期治療までを幅広くカバー

皮膚科は常勤5名体制で、皮膚腫瘍・皮膚外科を中心とした幅広い診療を行っています。皮膚がんは高齢化社会を背景として増え続けており、当院では皮膚がんに対する手術・放射線療法・薬物療法を組み合わせた集学的治療を担うとともに、皮膚良性腫瘍に対する手術治療にも積極的に取り組んでいます。

当科の強み

専門スタッフによる充実した診療体制

- ・皮膚科専門医3名、皮膚悪性腫瘍指導専門医2名

豊富な症例数に基づく確かな皮膚がん診療

- ・院内がん登録全国集計における皮膚がん症例数は常に全国トップ5にランクイン！（図1）

良性から悪性腫瘍まで幅広い手術治療

- ・手術はすべて設備・スタッフの整った中央手術室で実施
- ・2025年実績：978件（外来771件／入院207件、悪性409件／良性569件）

皮膚がんの先進的治療開発に積極的に参画

- ・JCOG 皮膚腫瘍グループの主要参加施設
- ・悪性黒色腫をはじめとする皮膚がん治療薬の開発治験に多数参加

地域との強固な連携体制

- ・地域医療機関との活発な双方向連携を推進
- ・2025年度紹介数1,217件、逆紹介数1,252件（いずれも院内第2位）

学会・学術活動による研鑽

- ・日本皮膚科学会：2009年雑誌論文賞、2015年優秀演題賞
- ・日本皮膚悪性腫瘍学会：2025年優秀演題賞
- ・日本皮膚外科学会：2016年最優秀演題賞

皮膚がん啓発のための社会活動

- ・新聞・メディアを通じた皮膚がん啓発活動を積極的に展開（図2）
- ・その成果として、新潟県の上皮内黒色腫（早期病変）の罹患率は全国1位！



図1 当院における皮膚がん症例数の推移
（がん診療連携拠点病院院内がん登録全国集計より）



図2 『いい皮膚の日』に掲載した新聞広告

今後も、前方・後方連携を含めた緊密な地域医療連携のもと、地域に根差した皮膚腫瘍・皮膚外科診療を推進してまいります。地域医療機関の皆様からのご紹介をお待ちしております。

電話1本で
かんたん予約

窓口担当者が
ご案内します

紹介状不要で
受けられます



県立がんセンター新潟病院で安心の 「二次検診」を受けてみませんか



- がん専門病院だから精度の高い検査と診断が受けられる安心感！
- 精密検査と専門医による多職種チームが診断！

	大腸がん	胃がん	肺がん	乳がん	子宮がん
検査内容	大腸内視鏡	胃内視鏡 (経口)	胸部ヘリカルCT	マンモグラフィー エコー 細胞診など	コルポスコピー エコー 細胞診など
検査日	※外来受診後に日程調整 します		月～水曜日	火、水	
検査料金 (3割負担の場合)	5,000 ～ 35,000 円程度		7,000 ～ 11,000 円程度	5,000 ～ 12,000 円程度	



- 検査予約日前に来院の事務手続き（事前受付）が可能です。
事前受付により、検査当日の待ち時間が短縮できます。
- 検査結果、精密検査依頼書、一次検診のフィルムやCD-R等の持参をお願いします。
- マイナンバーカード、資格確認書や高齢者受給証（70歳以上）、公費受給者証、
お薬手帳（内服している方）の持参をお願いします。

詳細はホームページに掲載しておりますので、下記 URL よりご確認ください。

<https://www.niigata-cc.jp>

ホーム > 受診される方へ > 受診のご案内 > がん精密検診（二次検診）のご案内

がんドックについては、

ホーム > 受診される方へ > 受診のご案内 > 人間ドックのご案内

がん総合予防センター がんドックのページへ

二次検診・がんドック担当ダイヤル

☎ 025-234-0555

まずは相談。
お待ちしております



「忘れられない看護エピソード」

受賞者の紹介

公益社団法人日本看護協会の2026年度「忘れられない看護エピソード～いのち・暮らし・尊厳をまもり、支えるプロフェッショナル～」において、当院看護師が最優秀賞を受賞しました。受賞作品とともに、執筆に込めた思いをご紹介します。



最優秀賞

「その言葉は、誰のため？」

受賞者 岡部 卓也（東7病棟看護師）

配属されたばかりの小児病棟。白衣のポケットよりも胸の中に、緊張と不安をぎゅっと詰め込んでいた私は、毎日を失敗と反省の中で過ごしていた。そんな日々の中で出会った、一人の男の子。

彼は5歳。白血病の治療のため、長期入院していた。骨髄穿刺、髄液検査、何度も繰り返される採血。どれも彼にとっては恐怖そのものだった。処置のたび、かすれる声で「こわい、やめて！」と泣き叫ぶ彼に、私はただ必死で声をかけていた。

「すぐ終わるよ、大丈夫だからね」

何度も、何度も。自分自身に言い聞かせるように。

ある日、採血の準備をしていたときのこと。私はいつものように「大丈夫だよ」と声をかけた。すると彼は、涙をたたえた瞳で言った。

「大丈夫って、何が？」

その瞬間、言葉が喉の奥で凍りついた。「大丈夫」という言葉が、彼には「分かってもらえない」証しのように響いていたのだ。

たとえ5歳でも、彼は自分の身体の異変や恐怖を、きちんと感じ取り、理解していた。私はその日を境に、彼との関わり方を見直した。

処置の前には「何をするのか」「なぜ必要か」「どのくらい痛むか」を子どもにも伝わる言葉で丁寧に説明するようにした。そして、

「どっちの手にする？」「この絵本を読んでからにしようか？」と、小さな「選べること」を意識して増やしていった。

自分で選び、乗り越えた体験は、彼にとって「安心」と「自信」につながっていったのだと思う。

退院の日、彼は私の手をぎゅっと握りしめて言った。

「もう、だいじょぶだよ」

その笑顔は、今でも忘れられない。ようやく、あの言葉が彼にとって「本当に安心できる言葉」になったと感じた。私は彼から“言葉の重み”を教わったのだ。

看護とは、ただ処置をするだけの仕事ではない。目の前の人の感情に寄り添い、その「人生」に触れていく営みだ。治療の影にある小さな叫びや葛藤に気づき、向き合うこと—それこそが、看護の本質だと、彼が教えてくれた。



2026年度「忘れられない看護エピソード～いのち・暮らし・尊厳をまもり、支えるプロフェッショナル～」

2026年「看護の日・看護週間」

<https://www.nurse.or.jp/aim/simin/episode/index.html>

出典：公益社団法人日本看護協会

エピソードを書いた理由

この作品は、小児がんの患者との出会いを通して、私自身の新人看護師時代の経験を綴ったものです。看護に携わる方だけでなく、誰かを支える立場にある多くの方に、「その言葉は誰のためにあるのか」という問いを届けたいと思い、執筆しました。

看護師になると、「大丈夫ですよ」「よく頑張ったね」という言葉を日常的に使います。当時の私は、その言葉が本当に相手のためになっているのかを深く考えずに使っていました。先輩看護師からは、「もっと優しく声をかけてね」「子どもの目線で話してあげて」と教わりましたが、どんな声かけが「優しさ」なのかどこまでが「子ども目線」なのかかわからず、泣き叫ぶ子どもを前に立ち尽くすことしかできない日もありました。

男の子から「大丈夫って、何が？」と言われたとき、私は初めて立ち止まりました。安心してもらいたい一心で口にしてた言葉でしたが、その子の不安や恐怖に、私自身が十分に向き合えていなかったことに気づかされたのです。

特に小児看護では、相手が子どもであっても一人の人格を持った存在として向き合うことが大切です。何を感じ、何を怖がり、何を望んでいるのかを想像し、理解しようと努力すること、その積み重ねこそが看護の原点なのだと、患者さんから教えてもらいました。



受賞した感想

最優秀賞をいただけたことはとても光栄で、これまで出会った患者さんやご家族、共に働く仲間たちに感謝しています。

最近は、次々と起こる大きな出来事に目を奪われるうちに、自分の中に生まれる小さな出来事や感情の揺れを見過ごしてしまいがちと感じます。

現在、私は小児と成人の混合病棟で勤務しています。子どもたちの未来に寄り添う一方で、長い人生を歩まれた方々の最期にも立ち会います。その方がこれまで積み重ねた時間や言葉にならない思いに触れるたび、自分に何ができるのか、どのような言葉をかければよいのか立ち尽くすことがあります。

患者さんと家族に寄り添う看護を目指しながらも、現実には目の前の看護業務に追われ、自分の心の声を後回しにしてしまうことが少なくありません。それでもこのような機会を通して、自分の感情に目を向ける時間は、人と向き合う上で欠かせないものだ改めて感じました。

読者の皆様も、日々の忙しさの中で、ご自身の感情や心の声にも少し耳を傾けてみてください。私自身も、患者さんやご家族、そして自分自身の心に誠実に向き合いながら、一歩ずつ看護を続けていきたいと思っています。





ベッドコントロールセンターの紹介

外来統括・病床管理担当 看護副部長 阿部 智子



看護管理部メンバーとモニタリングシステム

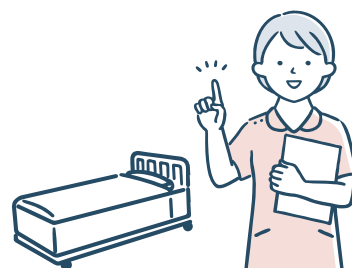
新潟県立がんセンター新潟病院は、令和 8 年 4 月 1 日にベッドコントロールセンターを開設しました。「患者さんが適切な時期に適切な医療を受けることができるように、効果的な病床コントロールを実現する」ことを目的に、看護管理部に病床管理担当看護副部長を配置し、看護部が主体となってベッドコントロールを行っています。

病院には緊急治療が必要なために救急搬送された方、外来で入院が決まった方、継続した治療が必要な方など、さまざまな状況の患者さんがいます。ベッドコントロールセンターでは患者さんの病状、必要な治療内容、病床状況をリアルタイムで把握し、その方に適した病棟へスムーズにご案内できるよう努めています。

さらにベッドコントロールセンターでは、モニタリングシステムを用いて病床に関する情報を一元的に管理し、院内のスタッフが同じ情報を共有できる仕組みづくりを行っています。病棟ごとの稼働状況や入退院の動きを「見える化」することで、医師や看護師が状況をすぐに把握でき、より迅速で安全な医療提供につなげています。こうした情報共有の強化は、院内全体の連携を高め、業務の効率化にも寄与しています。

今後は、患者サポートセンターとベッドコントロールセンターの協働をより強化していくことが課題です。患者サポートセンターが持つ地域医療機関との調整力と、ベッドコントロールセンターが担う院内の病床管理を組み合わせることで、より切れ目のない医療提供体制を目指しています。

ベッドコントロールセンターは、患者さん一人ひとりの状況を正確に把握し、最適な医療の提供につながるよう調整を担う部署です。これからも、患者さんが安心して治療に臨めるよう、適切な病床管理を継続してまいります。



病院を支える職員の活力のみなもととは？

事務長補佐 小形 峰雄

当院では毎年、病院運営に貢献した職員を称える「院長表彰」を実施しています。この表彰は、患者さんへのより良い医療提供、そして病院の発展に寄与した職員の功績を称えるものです。

職員の「やる気スイッチ」を押す力に

この表彰には、職員のモチベーションを高める大きな力があります。「認められた！」という感動で、やる気スイッチがON。自身の努力が評価されることで、職員は「もっと頑張ろう！」という意欲を高めてくれます。



チームの絆が深まります

表彰の背景には関係するスタッフとの協力が不可欠であり、共に成し遂げた喜びを分かち合うことで、「ひとりじゃない」と認識し、チームの絆がさらに深まります。



地域社会にも「いいこと」がいっぱい

職員の意欲とチームワークに満ちた病院は、患者様にとって安心できる場所にもなります。病院が活性化することで、地域の健康と笑顔に貢献できると考えております。



「縁の下の力持ち」に光を当てる

院長表彰は、普段は「縁の下の力持ち」として奮闘する職員にも、院長が直接感謝を伝える年に一度のイベントです。医療現場の改善提案から業務の効率化、チームのムードメーカーまで、病院をより良くするために尽力した職員が脚光を浴びます。



「次はオレだ！私だ！」の連鎖で、病院全体にパワーがみなぎります

受賞者の姿は周囲の職員に刺激を与え、「次は自分も」というポジティブな連鎖を生み出し、病院全体に活気をもたらします。



病院の「らしさ」がキラリ。 理念が心に響きます

「すべての患者さんに最善のがん医療を提供する」といった病院の基本理念が、職員一人ひとりの日々の行動の中に息づいていることを再確認し、病院全体で目標に向かう意識を高めます。



当院はこれからも、「ここで働いてよかった！」と思える明るく楽しい職場を目指し、患者さんはもちろんのこと、地域の皆様の笑顔のために進化し続けてまいります。

